

---

## 25 チョークとフリント

---

日本人にとっては、地面が真っ白いのは、何となく変な感じがするのではないだろうか。イギリス南部のチョーク地帯では、表面の土をかき取ると、その下に、何十メートルもの厚さで真っ白い層が続いている。海辺の絶壁など、地面の芝草の下は、海面まで白一色。よくテレビの宣伝に、そうした風景が使われている。

チョークの層を通る地下水は、石灰分を多量に含むので、湯を沸かすとポットに石灰がこびりついてしまう。水を入れておいても、表面に石灰の固形分が浮いてきて、まるでカビのようだ。石灰を含む水が、体に良いのか悪いのか、それとも何の影響もないのか、私にはよくわからないが、肌が荒れるという人もいる。私は歯があまり丈夫ではないのだが、石灰入りの水を飲み続けていたせいか、イギリス風の強烈な甘さのケーキをよく食べたのに、虫歯はイギリス滞在中は進行しなかった。

ウイスキーに、ホワイトホースという銘柄がある。これは、イングランド南部の丘陵の斜面に描かれた、白馬にちなんだものだ。チョーク地帯では、表面の土をかき取ると、チョークが表れる。馬の形に芝草をはぐと、遠くから見れば、白馬になるわけだ。こんなホワイトホースが、あちこちにつくられている。

そのなかのひとつ、アフィントンのホワイトホースは、あまり馬らしくない奇妙な形で知られている。体は細く、顔もまったく馬らしくない。それに、ナスカの地上絵ではないが、空に向かって描かれていて、ふもとの村からはうまく見えないのだ。この奇妙な馬は、いわゆるケルト文様の馬に似ているということで、鉄器時代につくられたものだといわれてきた。ところが、最近の発掘調査で、このホワイトホースは青銅器時代までさかのぼることがわかったとされる。年代決定の方法に若干の問題があるが、少なくとも鉄器時代かそれより古いことは確かだ。ひと昔まえまでは、地元の村人が、定期的に芝草の端を切り取り、チョークを削って、馬の形を守ってきたが、そうした管理が、なんと2000年以上にわたって続けられてきたことになる。キリスト教が生活の隅々まで支配していた時代にも、異教徒の時代の習慣が、村人たちによって守り続け



チョークの露頭 (1996年撮影、著作権フリー)

られてきたわけだ。さすがは、ストーンヘンジを1000年以上にわたって作り続けた人たちの子孫という気がする。

チョーク地帯は、石なし地帯だ。チョークは、海の貝殻が堆積してできた石灰岩の親戚だが、固まりになっていても、重さがかかればすぐに崩れてしまうので、建物などには使えない。しかし、そうしたチョークの中に、フリントの塊の薄い層が見られることがある。海綿の死骸がたまってできたものではないかといわれていて、成分はガラスとよく似ている。このフリントは、石器時代には石器の材料として活用され、近代には火繩にかわる銃の発火具として、大きな役割を果たした。ウェッジウッドの陶器が良質なものも、フリントが混ぜられているかららしい。この石なし地帯を旅すると、家の外壁にはフリントの小礫が塗り込められ、教会などの建物にも、わざと割れ目を見せて美しい壁面がつくられている。限られた石材が、生活の隅々にまで活用されているようすを観察するのは興味深い。

17世紀には、イギリスでガラスが本格的につくられるようになった。そこで使われた材料は、このフリントだが、フリント・ガラスは、ちょっとしたはず



フリントを用いた土壁 (1991年撮影、著作権フリー)

みですぐに割れてしまう。イギリスの人たちは、紅茶を入れるときに、はじめに牛乳をカップに注ぐが、それはカップが急激な温度変化で割れてしまうのを防ぐための習慣が残っているという話を聞いたことがある。しかし、残念ながら、私には真偽のほどは定かでない。

---

1996 新納泉 著作権フリー

【Info】アフィントンのホワイトホース Uffington White Horse 51.577694, -1.566630